

自然を生かし、安全で住みやすく

「グリーンインフラ」が注目を集めている。自然の持つ機能を生かして土地の使い方を工夫し、より安全で持続可能な地域づくりにつなげる考えが広がる。防災、環境、地域振興など様々な要素を兼ね備え、分野をまたいで取り組んでいく点が、これまでのコンクリートなどのインフラや単なる緑化とは違う。まちにどこまで根づくか。

昨秋、東京都町田市にオープンした「南町田グランベリーパーク」。映画館やスノーピークミュージアム、多彩な店舗が並ぶ新たな人気スポットだ。市と東急電鉄が、駅につながる商業施設と公園を一体で再開発した。

その一角には、レインガーデンと呼ばれる場所がある。石が敷き詰められ、ハンノキやネコヤナギ、アゼスゲなど大小様々な草木が植えられている。降った雨を地中にしみ込ませて流出を抑え、川や下水道があふれにくくする仕掛けで、雨庭とも言う。

気候変動へ適応 持続可能な工夫

遊歩道沿いには側溝のように石が敷かれ、緑地帯が連なる。これも雨水を浸透させるバイオスウェル（緑溝）という手法だ。浸透性舗装も施し、調整池は容量を倍にした。店舗は緑をちりばめたオープンな空間に面し、散歩の延長で歩き回れるようになっていく。公園には、気軽に体を動かせるトラックや表示を整えた。

行き来の少なかった二つの場所をつないで街の価値を高め、新たな定住も

促すのが再開発の狙いだ。公園での行事で地域の文化も育み、防災や健康づくりにもつなげる。プロジェクトに携わった東京農業大の福岡孝則准教授は「利便性が高く自然に近い街の魅力を生かしている。グリーンインフラの一つのモデルになる」と言う。

自然に備わる多様な機能を社会の基盤に生かしていくのがグリーンインフラだ。気候変動や人口減への適応が求められる。生物多様性や持続可能性が重視される時代。この言葉が使われる場面が増えてきた。

里山や水田から街なかの緑地まで、いろいろなもの対象になる。グリーンインフラと言っても、植物に限らない。洪水を逃がす霞堤や遊水地のような治水工法、コンクリート構造物との組み合わせ

せ、土地利用の見直しまで幅広い。機能が一つだけでない多面性や、様々な立場の人がかかわるのも特徴だ。

なかでも雨庭のような雨水対策は、市街地での身近な取り組みの代表例といえる。都市は建物や舗装に覆われ、雨水が一気に流れ出る。排水能力を上回れば浸水を招き、下水道によっては汚水が川や海に直接流れてしまう。ためたり浸透させたりする工夫が増えれば、流出量のピークは低くなるからになり、豪雨に強い街になる。

しかも都市の緑地は暑さを和らげ、昆虫や鳥も呼び込む。心に潤いをもたらすし、地域活動や教育にも生かせる。自治体の取り組みも広がってきた。

京都市の中心部、四条堀川の交差点には2018年、歩道の角に雨庭が整備された。地元産の岩を配した日本庭園風で、歩道と車道の両側から水が流れ込む構造だ。維持管理には住民が携わる。今年はいよいよ側の角にも完成し、さらに増やしていくという。

東京都世田谷区は、18年に定めた豪雨対策行動計画にグリーンインフラの促進を明記。区内の緑地を増やす数値目標と合わせ、公園や道路、宅地などでの貯留・浸透を増やしていくという。横浜市も市の計画に位置づけ、公園や道路のほか農地の浸透性を高める取り組みを進める。

以前から雨水タンクや浸透ます、雨水利用といった取り組みはあったが、激しさを増す豪雨に対処するには個人宅も含めた面的な広がりが必要だ。様々な目的を併せ持つグリーンインフラの考え方は、拡大に向けた原動力になる。NPO法人雨水まちづくりサポーターの神谷博理事長は「みんなが取り組めば大きな力になる。目に見える成功事例をつくってほしい」と話す。

推進へ国が戦略 異分野連携が鍵

普及に向けては、効果や価値の見え化、ノウハウの蓄積や技術基準の整備、制度づくりも課題になる。目的が幅広いだけに行政の部署の縦割りや専門分野を超えた検討も欠かせない。

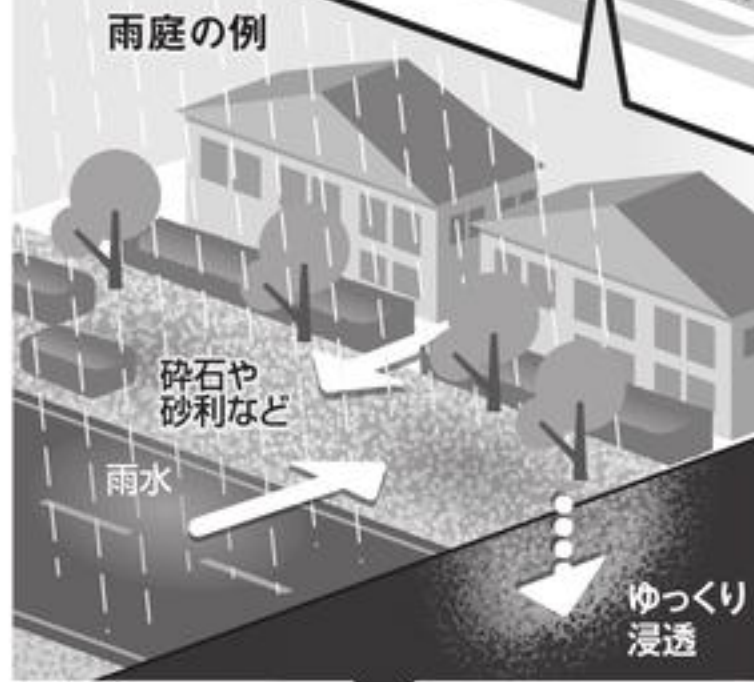
国土交通省は昨年、グリーンインフラ推進戦略を公表。今年3月には官民の連携組織も発足した。企業、自治体、研究者や市民ら会員は400を超える。異分野の交流を促す催しや、アドバイザーの派遣などを検討中だ。

増える空き地もグリーンインフラに生かせる。地域の事情に応じていかに知恵を集められるかが、定着へのかぎになる。

(編集委員・佐々木英輔)

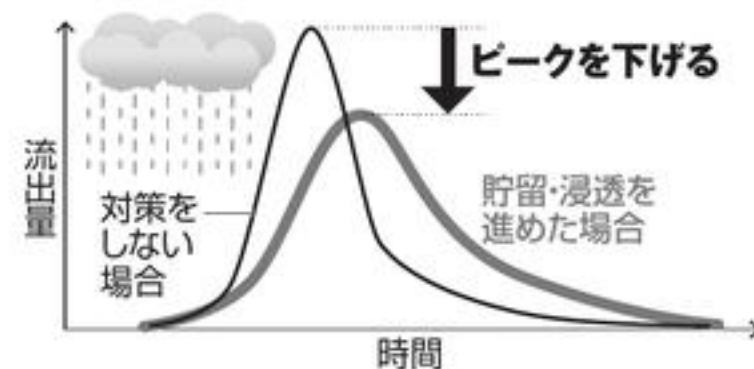
グリーンインフラ

自然の持つ機能をさまざまな形で生かす取り組み



雨水をためたり、浸透させたりすることで流出を抑える

雨水対策の効果のイメージ



グラフィック・山本 美雪

◆今回の「be report」は「進化する国産ナチュラリース」。毎月第一週は「北欧女子オーサの日本探検」です。